

藤棚の陰から

寺田寅彦

青空文庫

若葉のかおるある日の午後、子供らと明治神宮外苑めいじじんぐうがいえんをドラ
イヴしていた。ナンジャモンジャの木はどこだろうという話が出
た。昔の練兵場時代、鳥人ミスが宙返り飛行をやって見せたこ
ろにはきわめて顕著な孤立した存在であつたこの木が、今ではち
よつとどこにあるか見当がつかなくなっている。こんな話をしな
がら徐行していると、車窓の外を通りかかった二三人の学生が大
きな声で話をしている。その話し声の中に突然「ナンジャモンジ
ヤ」という一語だけがハッキリ聞きとれた。同じ環境の中では人

間はやはり同じことを考えるものと見える。

アラン・ポールの短編の中に、いっしょに歩いている人の思っていることをあてる男の話があるが、あれはいかにももってもらしい作り事である。しかしまんざらのうそでもないのである。

二

睡蓮すいれんを作っている友人の話である。この花の茎は始めにはま

つすぐに上向きに延びる。そうしてつぼみの頭が水面まで達すると茎が傾いてつぼみは再び水中に没する。そうして充分延び切つてから再び頭をもたげて水面に現われ、そうして成熟し切った花

冠を開くということである。つまり、最初にまず水面の所在を測定し確かめておいてから開花の準備にとりかかるといのである。なるほど、睡蓮すいれんには目もなければ手もないから、水面が五寸上にあるか三尺上にあるかわからない。もしか六尺も上にあつたら、せつかく花の用意をしてもなんの役にも立たないであろう。自然界を支配する経済の原理がここにも現われているのであろう。このつぼみが最初に水面をさぐりあてて安心してもぐり込んだ後に、こつそり鉢はちをもつと深く沈めておいたら、どういうことになるか。

これは一度試験してみる価値がありそうである。花には少し気の毒なような気はするが。

三

虞美人草ぐびじんそうのつぼみははじめうつ向いている。いよいよ咲く前になつて頭をもたげてまつすぐに起き直つてから開き始める。ある夏中庭の花壇にこの花を作つたとき、一日試みに二つのうつ向いたつぼみの上方にヘアピン形に折れ曲がつた茎を紙こよ撚りのひもでそつと縛つておいた。それから二三日たつて気がついて見ると、一つは紙ひもがほどけかかつてつぼみの軸は下方の鉛直な茎に対して四五度ぐらいの角度に開いて斜めに下向いたままで咲いていた。もう一つのは茎の先端がずっと延びてもう一ぺん上向きに

生長し、そうしてちやんと天頂を向いた花を咲かせていた。つまり茎の上端が「り」の字形になったわけである。

もっと詳しくいろいろ実験したいと思つていろいろうちに花期が過ぎ去つた。そうしてその年以來他の草花は作るが虞美人草はそれきり作らないので、この無慈悲な花いじめを繰り返す機会に再会することができない。

四

カラジウムを一鉢^{はち}買つて来て露台のながめにしている。芋の葉と形はよく似ているが葉脈があざやかな洋紅色に染められてその

周囲に白い斑^{はんとん}点が散布している。芋から見れば片輪者であり化け物であろうが人間が見るとやはり美しい。

ベコニア、レッキスの一種に、これが人間の顔なら焼けどの癩^は痕^{んこん}かと思われるような斑紋のあるのがある。やけどと思つて見るとぞつとするくらいであるがレッキスとして見れば実に美しい。

アフリカの蛮人でくちびるを鏡^{にようばち} 鋏^{ばち} のように変形させている

のや、顔じゆう傷跡だらけにしているのがあるが、あれはどうもどう見ても美しいと思えない。あれでもやはりまだあまりに多くわれわれに似すぎているからであろう。

ほんとうに非凡なえらい神様のような人間の目から見たら、事によるとわれわれのあらゆる罪悪がみんなベコニアやカラジウム

の斑点のごとく美しく見えるかもしれないという気がする。

五

朝二階の寝間の床の上で目をさまして北側の中敷窓から見ると隣ふろの風呂の煙突が見える。煙突と並行して鉄の梯子はしごが取り付けてあるのによくすずめの群れが来て遊んでいる。まず一羽飛んで来て中段に止まる。あとからすぐに一羽追っかけて来て次の段にとまる。第三のが来て空中で羽ばたきしながら前の二羽に何か交渉しているらしく見える。けんかが始まる。一羽が逃げ出して上へ上へと階段を登って行く。二段ずつ飛ぶこともあり五六段ずつ飛

び上がるときもある。地上七十余尺の頂上まで上ってしばらく四方を展望していると思うと、突然石でも落とすようにダイヴするが途中から急に横にそれて、直角双曲線を空中に描きながらどこかの庭木へ飛んで行く。しばらくするとまた煙突の梯子はしごへもどつて来てそうして同じ遊戯を繰り返す。見ていてもなんだかおもしろそうである。しかしなんのためにすすめがこんな遊戯をしているか、考えてみると不思議である。

梯子の中段で時々二羽のすすめの争闘が起こる。第三のすすめがこれに参加することもある。これはどうもただのけんかではなくて、やっぱり彼らの種族を増殖するための重大な仕事に關係した角逐かくちくの闘技であるらしく思われる。

あまりに突飛な考えではあるが、人間のいろいろなスポーツの起原を遠い遠い灰色の昔までたどって行ったら、事によるとそれがやはりわれわれの種族の増殖の営みとなんらかの点でつながっていたのではないかという気がしてくるのである。

六

電車に乗って空席を捜す。二人の間にやっと自分の腰かけられるだけの空間を見つけて腰をおろす。そういう場合隣席の人が少しばかり身動きをしてくれれば、自然に相互のからだがなじみ合い折り合って楽になる。しかし人によると妙にしゃちこばって土^ど

偶か木像のように硬直して動かないのがある。

こういう人はたぶん出世のできない人であろうと思う。

もつとも、こういう人が世の中に一人もなくなってしまうたら、世の中にけんかというものもなくなり、国と国との間に戦争というものもなくなってしまうかもしれない。そうなるとこの世の中があまりにさびしいつまらないものになってしまうかもそれはわからない。

こういう人も使い道によっては世の中の役に立つ。たとえば石垣しがきのような役目に適する。もつとも石垣というものは存外くずれやすいものだということは承知しておく必要がある。

むかでの歩くのを見ていると、あのたくさんの足が実に整然とした運動をしている。一種の疎密波が身長に沿うて虫の速度よりは早い速度で進行する。

もしか自分がむかでになってあれだけのたくさんな足を一つ一つ意識的に動かして、あのような歩行をしなければならぬとしたら実にたいへんである。思ってみるだけでも気が狂いそうである。

しかしよく考えてみると人間の一拳手一投足にも、実はむかでの足の神経などに比べて到底比較のできないほど多数の神経細胞

が働いているであろう。そんなことは夢にも考えないでむかでの足を驚嘆しながら万年筆をあやつつてこんなことを書くという驚くべき動作をなんの気もなく遂行しているのである。

八

軍隊用のラツパの音は勇ましい音の標本になっているようである。なるほど自分の面前の近距離で吹き立てられるとかなり勇ましく、やかましいくらい勇ましい。しかし木枯らし吹く夕暮れなどに遠くから風に送られて来るラツパの声は妙に哀愁をおびて聞こえるものである。

勇ましいということの裏には本来いつでも哀れなさびしさが伴なっているのではないかという気がする。

九

東郷 とうごう 大將 たいしょう の若い時の写真を見ると、実に立派でしかも明るく朗らかな表情をしたのがある。ジョン・バリモアなどにもちよつと似ているのがある。しかし晩年のいわゆる「東郷さん」になつてからの写真にはどれにもこれにもみんなどこか迷惑そうな窮屈そうな表情がただよっているような気がする。

世人は自分勝手に自分らの東郷さんの鑄型をこしらえて、そう

して理が非でもその型にはまることを要求した。寛容な東郷大将はそうした大衆の期待を裏切つて失望させては気の毒だと思つて、かなりそのため気をつかつておられたのではないかという氣もする。これは豚の心で象の心持ちを推し量るようなものかもしれないが、もしこの推量が当たつてしていると仮定したら、大衆は自分たちのわがままで東郷さんのほんとうのえらさを封じ込めてしまつたということになるかもしれぬ。

十

じんぼうちょう
神保町 交差点で珍しい乗り物を見た。一種の三輪自転車で

あるが、普通の三輪車と反対に二輪が前方にあつてその上に椅子いす形がたの座席が乗つかつてゐる。その後方に一輪車が取り付けられ、
そうして三つの輪の中央のサドルに腰をかけた人がペダルを踏んで
推進する仕掛けになつてゐる。座席に腰かけた人の右手にハン
ドルがあつてそれをぐるぐる回すとチェーリングアールで車台の下の
ほうの仕掛けがどうにかなるようにできてゐるらしい。たぶん座
乗者が勝手に進行の方向を変えるための舵かじのようなものらしい。

座席に腰かけてゐる人はパナマ帽に羽織袴はおりはかまの中年紳士で、ペ
ダルを踏んでゐるのは十八九歳ぐらいの女中さんである。

この乗り物が町の四つ角かどに来たとき、そのうしろから松葉杖まつばづえ
を突いた立派な風采ふうさいの青年がやつて来て追い越そうとした。袴

をはいているが見たところ左の足が無いらしい。それを呼び止めて三輪車上の紳士が何か聞いている。 せききやく 隻脚の青年は何か一言きわめてそっけない返事をしたまま、松葉杖のテンポを急がせて行き過ぎてしまった。思いなしか青年の顔がまっかになつていようように思われた。

呼び止めた歩行不能の中年紳士の気持ちも、急いで別れて行つた青年の気持ちもいくらかわかるような気がした。自分があの二人のどちらかだったら、やはり同じことをしたであらうと思われた。

風邪かぜをひいて軽い咳せきが止まらないようなとき昔流の振り出し薬を飲むと存外よくきく事がある。草根木皮の成分はまだ充分には研究されていないのだから、医者知らない妙薬が数々はいっているかもしれない、またいなくてもかもしれない。

それはとにかく、この振り出し薬の香をかぐと昔の郷里の家の長火鉢ながひばちの引き出しが忽然こつぜんとして記憶の水準面に出現する。そうして、その引き出しの中には、もぐさや松脂まつやにの火打ち石や、それから栓抜きせんぬめのねじや何に使ったかわからぬ小さな鈴などがだらしもなく雑居している光景が実にありありと眼前に思い浮かべられる。松脂は痰たんの薬だと言って祖母が時々飲んでいたのである。

この煎薬せんやくのにおいと自分らが少年時代に受けた孔孟こうもうの教え
には切つても切れないつながりがあるような気がする。

時代に適應するつもりで骨を折つて新しがつてみても、鼻にし
み込んだこの引き出しのにおいが抜けない限り心底から新しくな
りようがない。

十二

四五年会わなかった知人に偶然銀座ぎんざでめぐり会つた。それから
すぐ帰宅して見るとその同じ人からはがきが来ていた。町名番地
が変わつたからという活版刷りの通知状であつたが、とにかく年

賀状以外にこの人の書信に接したことはやはり四五年來一度もなかつたはずである。

そのはがきを出したのは銀座で会う以前であつたということとは到着の時刻からも消印からも確實に証明された。

この偶然な二つの出来事の コインシデンス 合致が起こるといふ確率は正

確には計算しにくいが、とにかく千分の一とか二千分の一とかいふ小数である。しかしそういうめつたに起こりそうもないことが實際に起こることがあるというのが、確率論のまさしく教えるところである。してみるとこれは不思議でもなんでもないと云われる。しかしまた、それだから不思議だとも言われる。要は不思議という言葉の定義次第である。

十三

「陸の竜宮」と呼ばれる日本劇場が経営困難で閉鎖されるといことが新聞で報ぜられた。翌日この劇場前を通ったら、なるほど、すべての入り口が閉鎖され平生のにぎやかな粧飾が全部取り払われて、そうして中央の入り口の前に「場内改築並びに整理のために臨時休業」という立て札が立っている。

近傍一帯が急にさびれて見えた。隣の東京朝日新聞社の建物がなんだかさびしそうな顔をして立っているように思われるのであった。

建物にもやっぱり顔があるのである。

十四

マルキシズムの立場から科学を論じ、科学者の任務に対していろいろな注文をつける人がある。その人たちとしては一応もつともな議論ではあろうが、ただの科学者から見るとごくごく狭い自分勝手な視角から見た管見的科学論としか思われない。

科学者の科学研究欲には理屈を超越した本能的なものがあるように自分には思われる。

蜜みつばち蜂が蜜を集めている。一つ一つの蜜蜂にはそれぞれの哲学

があるのかもしれない。しかしそんなことはどうであつても彼らが蜜を集めているという事実には変わりはないのである。そうして彼らにもわれらにも役に立つものは彼らの哲学ではなくて彼らの集めた蜜なのである。

マルキシズムその他いろいろなイズムの立場から蜜蜂みつばちに注文をつけるのは随意であるが、蜜蜂はそんな注文を超越してやつぱり同じように蜜を集めるであろう。そうして忙しい蜜蜂はおそらくそういう注文者を笑つたりそしつたりする暇すらないであろうと思われる。

中庭の土に埋め込んだ水甕みずがめに金魚を飼っている。Sがたんせいして世話したおかげで無事に三冬を越したのが三尾いた。毎朝廊下を通る人影を見ると三尾喙くちを並べてこつちを向いて餌えさをねだった。時おりのら猫ねこがねらいに来るので金網のふたをかぶせてあったのがいつとなくさび朽ちて穴の明いているのをそのままにしてあった。この夏のある朝見たら三尾の一尾が横になって浮いている。よく見ると鰓えらの下に傷あとがあつて出血しているのである。金網の破れから猫が手を入れて引っかけそなたものと思われた。負傷した金魚はまもなく死んでしまった。ちようどその日金魚屋が来たので死んだのの代わりに同歳のを一尾買って入れた。

夜はまた猫が来るといけなからというので網の代わりに古い風ふう呂桶ろおけのふたをかぶせておいた。翌朝あけて見るときのう買ったのと、前からいた生き残りのうちの一尾とが死んでいた。

死因がわからない。しかしたぶんこうではないかと思われた。

夏じゅうは昼間に暖まった甕の水が夜間の放熱で表面から冷え、冷えた水は重くなって沈むのでいわゆる対流が起こる。そのおかげで水が表面から底まで静かにかき回され、冷却されると同時に底のほうで発生した悪いガスなどの蓄積も妨げられる。それを、木のふたで密閉したから夜間の冷却が行なわれず、対流が生ぜず、従って有害なものが底のほうに蓄積して窒息死を起こしたのではないかというのである。これが冬期だといったいの水温がずっと

低いために悪いガスなどの発生も微少だから害はないであろう。これは想像である。

それにしても同じ有害な環境におかれた三尾のうちで二つは死んで一つは生き残るから妙である。

水雷艇「友鶴」の覆没の悲惨事を思い出した。

あれにもやはり人間の科学知識の欠乏が原因の一つになっていたという話である。

忘れても二度と夏の夜の金魚鉢きんぎよぼちに木のふたをしないことである。

野中兼山のなかけんざんが「棕鳥むくどりには千羽に一羽の毒がある」と教えたことを数年前にかいた随筆中に引用しておいたら、近ごろその出典について日本橋区にほんばしくのある女学校の先生から問い合わせの手紙が来た。しかしこの話は子供のころから父にたびたび聞かされただけで典拠については何も知らない。ただこういう話が土佐とさの民間に伝わっていたことだけはたしかである。

野中兼山は棕鳥が害虫駆除に有効な益鳥であることを知っていて、これを保護しようと思ったが、そういう消極的な理由では民衆に対するきき目が薄いということもよく知っていた。それでこういう方便のうそをついたものであろう。

「椋鳥は毒だ」と言っても人は承知しない。なぜと言えば、今までに椋鳥を食っても平気だったという証人がそこらにいくらかもいるからである。しかし千羽に一羽、すなわち〇・一プロセントだけ中毒の蓋然率^{プロバビリティ}があると言えば、食って平気だったという証人が何人あっても、正確な統計をとらない限り反証はできない。

それで兼山のような一国の信望の厚い人がそう言えば、普通のまじめな良民で命の惜しい人はまずまず椋鳥^{むくどり}を食うことはなるべく控えるようになる。そこが兼山のねらいどころであつたらう。

これが「百羽に一羽」というのではまずい。もし一プロセントの中毒率があるとすればその実例が一つや二つぐらいそこいらにありそうな気がするであろう。また「万羽に一羽」でもうまくな

い。万人に一人では恐ろしさがだいぶ希薄になる。万に一つが恐ろしくては東京の町など歩かれない。やはり「千羽に一羽」は動かしにくいのである。

こういうおどかしはしかし兼山に対する民衆の信用が厚くなければなんの効能もなくなることである。

兼山の信用があまりに厚かったためにいろいろの類似の言い伝えが、なんでもかでも兼山と結びつけられているのではないかという疑いもある。実際とさ土佐では弘法こうぼうだいし大師と兼山との二人がそれぞれあらゆる奇蹟きせきと機知との専売人になっているのである。

野中兼山のなかけんざんの土木工学者としての逸話を二つだけ記憶している。

その一つは、わずかな高低凹おうとつ凸の複雑に分布した地面の水準測量をするのに、わざと夜間を選び、助手に点火した線香を持って所定の方向に歩かせ、その火光をねらって高低を定めたとはい伝えられていることである。しかしねらうのには水準器のついた望遠鏡か、これに相当する器械が必要であろうがそれについては聞いたことがない。

もう一つは浦戸港うらんどこうの入り口に近いある岩礁を決して破壊してはいけない、これを取ると港口が埋没すると教えたことである。しかるに明治年間ある知事の時代に、たぶん机の上の学問しか知

らないいわゆる技師の建言によつてであらう、この礁かくれいわが汽船の出
入りの邪魔になると言つてダイナマイトで破碎されてしまった。
するとたちまちどこからとなく砂が港口に押し寄せて来て始末が
つかなくなつた。

故工學博士ひろいさむ広井勇氏が大學紀要に出した論文の中にこのとき
の知事のことを “a governor less wise than Kenzan” としてあつた
ように記憶する。実に巧妙な措辞そじであると思う。この知事によ
うな為政者は今でも捜せばいくらでも見つかりそうな気がするの
である。

少なくとも、むやみに扁桃腺へんとうせんを抜きたがる医者は今でもいくら
もいるであらう。

十八

近年の統計によると警視庁管内における自殺者の数が著しく増加し、大正十一年と昭和八年とでは管内人口の増加が約六割であるのに対して自殺既遂者の数は二十割、未遂者の数は四十割に増加しているとの事である。ある新聞の社説にこの事実をあげてその原因について考察し為政当局者の反省を促している。誠に注目すべき文字である。

しかし多くの人の見るところによれば、自殺の増加の幾割かはたしかに新聞の暗示的、ないし挑発的記事の影響に因るものであ

ろうと思われるが、右の新聞の社説にはこのことについては一言も触れてない。触れないのは当然であろうがちよつとおかしい。

「自殺の報道記事は十行を越ゆべからず」という取締規則でも設けたら、それだけでも自殺者の数が二割や三割は減るのではないかという気がする。試験的に二三年だけでもそういう規則を遂行して後に再び統計を取ってほしいものである。

十九

入水者じゆすいしやはきつと草履ぞうりや下駄げたをきれいに脱ぎそろえてから投身する。噴火口に飛び込むのもリュックサックをおろしたり靴くつを

脱いだり上着をとったりしてかかるのが多いようである。どうせ死ぬために投身するならどちらでも同じではないかという気もするが、何かしら、そうしなければならぬ深刻な理由があると見える。

この世の羈絆きはんと濁穢じよくえを脱ぎ捨てるという心持ちもいくぶんあるかと思われる。また一方では捨てようとして捨て切れない現世への未練の糸の端をこれらの遺物につなぎ留めるような心持ちもあるかもしれない。

なるべく新聞に出るような死に方を選ぶ人の心持ちは、やはりこのはき物や上着を脱ぎそろえる心持ちの延長ではないかとも思われるのである。

結局はやはり「生きたい」のである。生きるための最後の手段が死だという錯覚に襲われるものと見える。自殺流行の一つの原因としては、やはり宗教の没落も数えられるかもしれない。

（昭和九年九月、中央公論）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第四卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年5月15日第1刷発行

1963（昭和38）年5月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年6月13日第65刷発行

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2003年4月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

藤棚の陰から

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>